２０２２年度　公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費　実績報告書

2023 年　4 月　21 日

北九州市立大学長　様

（所属・職名）　基盤教育センター・准教授

（氏名）　高木　駿

公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

<table>
<tr><td>研究課題名</td><td colspan="6">近代美学における美の概念をジェンダーの視点から批判する：認識能力および心の能力によるジェンダー不平等の隠蔽について</td></tr>
<tr><td></td><td>合計</td><td colspan="5">使用内訳（単位：円）</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td>700,000</td><td>備品費</td><td>消耗品費</td><td>報酬</td><td>その他</td><td>旅費交通費</td></tr>
<tr><td>執行額</td><td>699,734</td><td>69,800</td><td>99,684</td><td>311,200</td><td>26,320</td><td>192,730</td></tr>
<tr><td>執行残額</td><td>266</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">共同研究者</td><td colspan="2">所属・職名</td><td colspan="2">氏名</td><td colspan="2">役割分担等</td></tr>
<tr><td colspan="2">早稲田大学大学院文学研究科・博士後期課程</td><td colspan="2">石川茉耶</td><td colspan="2">本研究のうち、ショーペンハウアー美学に関わる研究を担当する</td></tr>
</table>

研究分野：美学、哲学

キーワード：近代美学、ジェンダー、フェミニズム

研究成果の概要

本研究は、I. カントと A. ショーペンハウアーの美学的著作を丹念に読解し、そのコンテクストをジェンダーの観点から批判することを通じて、美しさの理論にとって中心的役割を担う認識能力（心の能力）が、ジェンダー中立的を装いながらも、実際には、男性による女性支配をモデルとした美の概念を成立させ、なおかつ、ジェンダー不平等を隠蔽する機能を持つことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、美学の学問領域ではいまだに不十分と言わざるをえない美の女性に対する関係の究明を進展させるだけでなく、セクシャリティ研究やジェンダー研究などの成果と協働することで、美をめぐる男女の非対称性および格差、不平等を暴露し、ジェンダー公正・正義を動機づけることにも発展的に寄与するはずである。本研究には、単なる美学研究にとどまらず、ジェンダー不平等という火急の社会的課題に対して、美の概念の分析を通じた是正運動をエンカレッジするという社会的な意義も指摘できる。

1. 研究の背景

「美しさ」という言葉から連想するものの候補に「女性」をあげる人は多い。美は女性と強く結びつけられ、女性を苦しめるジェンダー規範の一つになっている。この事態を、セクシャリティ研究は、性的客体としての美しい身体が女性に強制・強要されている事態であると分析し、美を男性による女性支配の象徴と見なした。セクシャリティ研究の成果が蓄積される一方で、なぜ美が女性と結び付けられ、女性を抑圧する概念であるかなど、美をめぐる問いに対する美学からの応答成果は乏しい。それは、美学が、ジェンダーという視点をめぐっては崇高概念を問題にしてきたからである。

2. 研究の目的

そうした背景を受けて、本研究は、現代美学の源である 18～19 世紀西洋の美学理論をジェンダーの観点から批判的に再検討することで、美が持つ、女性との関係、女性に対する抑圧構造を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

その目的を遂行するために、本研究は、美を説明する構造の中心に位置づけられた「認識能力」（「心の能力」）に着目した。「美とは、認識能力が特定の仕方で働く際に、対象に見出される性質である」と近代美学は説明した。本研究は、認識能力およびそれが働くプロセス・構造をジェンダーの観点から再解釈することによって、認識や心に関連する点でジェンダー中立的に見えるそれらの能力が、実は、男性による女性の支配をモデルとした美を成立させ、なお、そのジェンダー不平等を隠蔽する機能をも持つことを明らかにした。

より具体的には、近代美学を代表し、なおかつ、認識能力に基づく美学理論を展開した二人の哲学者、カントとショーペンハウアーを取り上げ、前者については『判断力批判』(1790)、後者については『意志と表象としての世界』(1819/1844)を主な対象に、ジェンダーの観点によるテクストクリティークを展開した。その際には、これまで日本の男性中心的なアカデミアのなかで軽視・蔑視されてきたと言わざるをえない哲学・美学に関する国内外のフェミニスト研究者(竹村和子, R. Schott, 大越愛子, etc.)による関連研究の成果を積極的に評価・受容・批判・援用した。

4. 研究成果

図書

・高木駿『カント『判断力批判』入門 美しさとジェンダー』, よはく舎, 2023 年.

論文

（査読あり）
・石川茉耶「「無関心性」概念から考えるフェミニスト美学」, 美学会『美学』第 73 巻 2 号（261 号）, 25-36 頁, 2022 年.
・Ishikawa, M., The Male Gaze: What It Is and How It Affects Aesthetic Experience, 早稲田大学哲学会『フィロソフィア』第 110 号, pp. 85-100, 2022.
（招待あり）
・高木駿「隠された美の家父長制 ― ジェンダーに基づくカント美学批判」, 日本カント協会第 23 号, 153-164 頁, 2022 年.
（査読なし）
・Ishikawa, M., Feminism in Aesthetics: Where We Are Now, 早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻哲学コース『哲学世界』第 45 号、pp. 16-25, 2022.
・高木駿「日本のフェミニスト・アートの現在（その一）―金沢 21 世紀美術館「FEMINISMS」展」, 北九州市立大学基盤教育センター紀要第 39 号, 49-60 頁, 2022 年.

口頭発表
（査読あり）
・石川茉耶 「ジェンダーの観点から美の不均衡を考える」, 日本女性学会 2022 年度大会, 2022 年.
・石川茉耶 「ショーペンハウアー美学のフェミニズム的分析」 , 日本ショーペンハウアー協会 第 35 回全国大会, 2022 年.